

# 鄙びたところを上手に生かす、 八幡の良さを温存しながら新しいものを入れていく

西村恵美子氏（元八幡堀を守る会事務局長）

西勝酒造株式会社<sup>i</sup> 酒游館オーナー、浜ぐら<sup>ii</sup> 元オーナー、  
一般財団法人ハートランド推進財団<sup>iii</sup> 理事。

## 目次

■ まちづくりへの関わり	2
■ 蔵をどうするかは、私たち女性に課せられた使命	3
■ 近江八幡の観光は奥深いもの	4
■ 昔からの習わしを辿ると自然発生的に集まる	4
■ 鄙びたところを上手に生かす	5
■ 普段は知らん顔、でもみんなの原点は八幡堀	6
■ 八幡の良さを温存しながら新しいものを入れていく	6
■ 次の世代につながっていく喜び	6
■ 地域に根付くのは地域本来のもの	7
■ 八幡堀を守る会の活動で広がったつながりの記憶	7
■ みんなの合意と協力で成り立っているのが八幡堀	7
■ 八幡堀は魚たちが生きる大切な場所	8
■ 市民、子供が喜ぶ八幡堀での体験	8
■ 八幡堀は自分たちだけのものでない、地球は一つ	8
■ 八幡は誰のものというわけではなく、みんなの手作り	9
■ 磨きすぎない、ほどほどに、適度に、節度をもって	9

**司会** ここ数年近江八幡に仕事で関わる機会をいただきましたこともあり、近江八幡における観光に対する意識について、これまでまちづくりに関わっていらっしゃる方にお話を伺っています。

観光に対する意識は地域それぞれですが、近江八幡は、独自の考えが醸成されているように感じています。単純に観光を好意的に見ているか否定的に見ているかというようなことではなく、観光に対する独自の考え、意識がここでなぜ生まれてきたか、それを少しでも把握できればと思っています。

**西村** 私自身、今話しにあったまちづくりへの関心などについて、何か少し整理しておかなければと思っており、資料を見ていたら、いつ頃書いたか分からないのですが、20年以上、30年近く前に書いた文章を見つけました。

#### 埋もれた宝と町づくり

「町づくり」「町おこし」という言葉がまだ市民権を持たなかった約二十年前、歴史的遺構としての八幡堀の景観に、「浜ぐら」はなくてはならないものとして、純粋な気持で保存修復に取り組んだことを思い起します。

以来いぶし銀の様な宝物が埋もれている町を、どう甦えらせるか、掘り起こしすぎても、又磨きすぎてもいけないと言う課題を抱えながらの活動でした。

県の景観審議会や近江八幡の町づくりの中で思った事は、この町に息づいている歴史の重みと、脈々と受継がれて来た生活文化と、精神の継承と保存が根底にあってこそ、近江八幡の誇りうる町づくりがあるということです。

八幡城の長い歴史の流れの一コマに身を置き再生運動に関わって来たこと、又二百年余り続いた町家の隅々にまで染みついた先人の心入れを感じながらの生活。これらの経験から、単なる修景保存では将来魅力が薄れていくのではないかと危惧されます。現代のニーズ、文明の利器を取り入れつつ、最も大切な生活者との係わりを意識した近江八幡の街を次世代へ継承していく為に、少しでも役立ちたいと願っています。

西村恵美子

## ■まちづくりへの関わり

**西村** 私の主人(西村一三氏)は近江八幡青年会議所(以下 JC)5代目会長で、八幡堀再生の運動に最初から関わり、『よみがえる八幡堀』の発刊に関わっていました。それが私とまちづくりの接点です。

ここが原点で、初めから観光を立ち上げようとか、そうした意識はなかったのです。自宅の2階で、5、6人の方が国へ陳情に行くための文章を徹夜して朝6時ごろまで一生懸命に作成していました。川端五兵衛さんもいらっしゃいましたが、もうひとつ年齢が上の方が中心でした。主人の父と五兵衛さんのお父さんは、朝7時頃からでも、「おはよう」と言って来られたら、夜10時、11時に帰るぐらい仲良しだったのです。だから、五兵衛さんも、その頃から、「一三さん」と言って来るような関係でした。

そうした中で、『よみがえる八幡堀』の冊子をまとめたときは、主人は40歳で、青年会議所を出ないといけないうきでしたので、その冊子に私の主人の名前は入っていません。この中に記載のある先生がたは、皆存じ上げており、その後いろいろな面で接点がありました。西川幸治先生は、滋賀県の景観審議会の委員でも一緒に、苗字がNで席が隣でした。いろいろな方から知識を学び、考えなどを教えていただきました。

この発端は、『よみがえる八幡堀』で、八幡堀の再生は観光のためにするのではない。まちづくりのまだ前の段階で、汚れてしまった八幡堀、疲弊してしまっていた町並みなどを蘇らせなければ八幡は始まらない、先人に対して申し訳ない、という気持ちが彼らを突き動かしたと思います。一生懸命になって、7、8年の年月を掛けて再生したからこそ現在の八幡があります。

河合隼雄<sup>iv</sup>先生が文化庁の長官になられたときに、地方講演に来られて、対話の機会がありました。私が「文化的遺産が、観光に結びついている」と言いましたら、「そんなの初めて聞いた。僕これからどこかよそに行ったら、それを使わせてもらう」と先に言われたぐらいでした。

## ■蔵をどうするかは、

### 私たち女性に課せられた使命

**西村** 八幡の浜ぐらの前には、ホテイアオイがいっぱい、これをみんなで除去しました。八幡堀の佇まいは、白壁の古い蔵が落とす影、穴太衆が造った穴太積みの石垣などが集約されています。明治橋から見た風景での存在感はすごいです。

八幡堀の運動は男の方が一生懸命にやられました。私たちも、みんなその家内だったわけです。家外、家内と言いますが、皆家を守っていて、彼らはいつも家外に出ており、JCの活動は、そのようなものでした。そして皆晩になると、京都へ飲みに行き、またそこで話していました。しかし、そういうところから八幡堀再生の運動につながり、そして、250メートルの再生につながりました。

そうした中でこの蔵をどうするかは、私たち女性に課せられた使命と感じ、皆自身のお金や、ある人は自ら借金をして取り組んだのです。300万円ずつ出したのでは足りなかったのです。皆偽物はつくりたくないという想いでした。中は1尺ほどの間隔で竹が組まれている蔵造りの建物です。八幡堀沿いにある柳の木も、私たちが運動をしている5人の男性がたに「木が一つもないのもおかしいから、何か植える植木などを寄付して」と言っていて、5人からお金をもらって、柳と花を3種類植えました。その柳の影が障子を通して家の中に影を落としている、そういう姿というのは、若い都会で育った方には分からないわけですよね。ここをそのような場所にして、そういう昔からの佇まいをここで味わってもらったらどうかと当時考えました。まだここに喫茶店も何もない頃のことです。

**田中** そうですね、ここには本当に何もなかったですね。

**西村** 何もない時代で、人を雇えないから自分たちで当番で運営していた時に、女の子が4、5人入ってこられて、「わあ、ナウイ」と言われました。それを聞いて、私たちの思いは成功したなと思って嬉しかったですね。やはりそういった昔からある八幡の姿を蘇らせ、昔のままにしました。落ちていく夕日の影が、蔵を通して水面に映し出されます。ここでは、朝から晩まで、

いろいろな景色が見えるわけです。そういうものを、そういう方たちに味わってもらって、日本ってこんな素晴らしい所もあるのだというのを知ってもらいたいですし、そういうものをむやみやたらに潰したりしない方向に自ずとなっていました。今では、京都などでは古い家を使った施設がありますけれども、今から40年前は本当になかったです。そして、私たちは、それをイコール観光にしようというのではなく、自ずとそうになっていったのです。まちづくりがまず最初です。昔からの味を掘り起こしてみたら、それが図らずも、皆さんが郷愁として持っていた何かにつながり、それが観光につながっています。

新町通りはもともと酷い状態でした。皆格子戸も壊れかかっていたりしていましたが、伝建地区になり、私も伝建の委員を務めました。八幡での委員はそれだけでしたが、滋賀県のほうは、いろいろなことに関わりました。景観づくりはもちろんのこと、河川景観に関する委員も務めました。滋賀県には、琵琶湖に流れる昔からの古い川があります。鈴鹿のほうの山奥から流れてくる川、伊吹のほうから流れてくる川、安曇川などです。委員任期は通常4年ですが、8年間勤め、私としては勉強させてもらいました。他の委員は偉い人ばかりでした。西川先生ともそういう会でお知り合いになりました。

**田中** 特に観光を意識することはなかったでしょうか。

**西村** なかったです。所謂本来の八幡のこの良さを、元に戻そうというもの。それが図らずも観光につながっていきました。

**田中** 浜ぐらさんは西村さんをはじめ八幡の主婦5人ほどが集まって運営されていたのです。所謂女性の時代など社会で言われる少し前の時代に始まった取組なのですね。奥さんがやっていることに旦那が口を出さない、旦那がやっていることに奥さんも口を出さないという関係だったので、八幡の町に女性らしさが出てきた、観光客を迎えられるようになったというのがあります。浜ぐらさんは、観光客が気軽に立ち寄れるお店第1号になっています。メンバーの皆さん年齢が高くなって共同で管理できなくなったので、今はメンバーの1人のカネ吉さんという近江牛のお店に譲渡され、運営されています。

**西村** 私たちは昔の手こぎの舟を持っていましたが、八幡堀に絶対に舟なんか入れないと言っていました。事業者の方が入ってきましたが、3年ぐらいは営業しないで置いていました。今は、八幡堀にあって当たり前になってきましたけれども、世の中が変わるに従って仕方ないことですね。

## ■近江八幡の観光は奥深いもの

**西村** 私は倉敷出身ですが、中学校は戦災で焼失し、倉敷に疎開して来ていた岡山大学<sup>v</sup>(青年師範学校)の附属中学に行きました。市内の小学校から120名が募集されて、小じんまりと教生の先生に囲まれて、良い学びの場でした。

先日、附属中学の同窓会があり行きました。そして、今度はみんなを八幡で迎えました。ある同級生からは、所謂観光という言葉のほうが早いかもしれませんが、近江八幡の観光と倉敷の観光との違いは、倉敷は私が八幡へ来る前から、所謂観光都市にしようということから始まっていて、倉敷紡績所<sup>vi</sup>の工場が倉敷アイビースクエア<sup>viii</sup>になったのは、私が八幡へ来た頃でした。私は八幡の観光は、それはそれで個性的であり、すごい思い入れのある、奥の深いものだと感じました。倉敷が深くないというわけではないですが、訪れるたびに新たなものができて変わって行きました。赤レンガで素敵なお店の塀だけれども、そういう所が一変してきれいなホテルになり、倉敷の公会堂みたいになって、音楽会ができる所もできたり、いろいろ変わって行きました。

倉敷の町の中には倉敷川が流れています。私たちが子どもの頃まで、児島湾から船が入ってきて、その川を渡って、突き当たりの大原さんの家まで来ていました。魚市場があって、お魚を売っていました。八幡堀とは成り立ちが違いますが、倉敷に帰るたびに私たちは、ここの家もこうなってるわと話していました。倉敷は路地の町のような町で、学校から帰るときわざわざそういう道を通ったりしたこともあるのですが、路地奥にある蔵が喫茶店になっていたり。倉敷紡績は、その後、倉敷レイヨンになったときに、丹下健三さん<sup>ix</sup>など所謂建築家の偉い人たちを呼んできて、相談して、お金もあったので、あのようなまちづくりをされた

ようです。だから、昔の商店街はもとは立派な店構えでしたが本当に寂れていきました。人通りも変わっていく、そんな現状も見ていますし、八幡はそういうふうになったらいけないなと思っていたけれども、世の中の観光に対する認識は変わって行きました。八幡は一足遅れたけれども、それで良かったなと思っています。

## ■昔からの習わしを辿ると自然発生的に集まる

**西村** 浜ぐらを再生したことによって、「八幡堀を守る会<sup>x</sup>」の事務局を30年間勤めさせていただきました。その関係で全国各地の方とつながりができました。

名古屋市近郊の市役所からの依頼で300人規模の集まりで話してほしいというものでした。所謂まちづくりというよりも、みんなが集まる場所づくりをどうしたらできますかという内容のものでした。市内では、小川のような背割という川があります。金剛寺というところにも川があり、滋賀県から依頼で行って、同志社大学の先生と一緒に助言をしに行ったことがあります。

所謂琵琶湖に流す水は、きれいな水でなければいけないから、町の人がみんな、八幡堀はおろか、自分の家から流す水も、きれいにろ過して流さなければいけません。流した水がずっと田んぼの中を通して、琵琶湖にも入りますし、八幡堀にも行きます。そういう昔からの習わしがあります。そうした歴史的な遺産が功を奏して、みんなつながって、まちづくりになってきているのです。

名古屋に話に行ったときに、私たちは自分たちの生活の中で、お水でもこうして使う、それは琵琶湖に行く、そして八幡堀の話もしましたし、何も意識的に、みんなで集まって集落をつくりましょう、コミュニティーをつくりましょう、だからみんないらっしゃい、ということのできたわけではないと話しました。自然発生的にそういうものができていたのですよというようなことを話したのを覚えています。

富山県の高岡からも呼ばれました。昔からの所謂歴史的な景観のところですよ。景観づくり10周年記念のときに、江南良三さん<sup>xi</sup>の代わりに行くことになりました。一緒にやっていた村井幸之進<sup>xii</sup>さん(ヒアリング記録3参照)、そして、江南さんの紹介で八幡に来られ

た方と3人で行きました。話をせよと言われたけど、あの町は規模が違いますよね。でも、あそこも全体ではないのですよね。一部ですが、大切に残されています。そのなかに見てくださいというオープンハウスの家があり、訪れました。4軒あるうちの1軒は、偶然にも10年ぐらい八幡にいた朝日新聞の記者の方の家でした。「あの家、僕の家なんや、3日ほど前から帰らされて、お母さんが掃除せいで言われて、ほいで見てくれた？ありがとう」と言われるなど、そんな出会いもありました。

文士の大伴家持は越中国守として5年間高岡の地に赴任し、いっぱい歌を詠んでおられます。その人にちなんで、高岡城の庭で本格的な野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」が行われています。踊りもあれば、演劇もあり、それを観るために周りからいっぱい来られていました。しかしその演劇の内容は、何も観光を意識したものではなく、冬から春になったという喜びの表れが、観光に結びつくというような、そういう素晴らしい演劇でした。本職の方を入れていると思います、ナレーションも違っていました。

八幡堀守る会事務局として、いろいろなところを見せてもらいました。大聖寺は、本当に手作りの観光でした。細い川を手こぎで行って、柳行李の中に手作りのおにぎりが入った本当のお弁当の様なものを売って、それがまた良くて、そういうのも見せていただいたりして、本当に私は幸せだったなと思っています。いろんな所で人にも出会え、学ぶことがいっぱいありました。

新潟からは3名ぐらいの方が八幡に来ておられます。ウェルサンピア滋賀(滋賀厚生年金休暇センター)に宿泊され、あそこで一晩中、12時ぐらいまでしゃべっていたかと思います。みんなと一緒に八幡も散策して、八幡堀も歩きました。向こうの方と私で順番がいろいろあって、2歩ほど歩いたら新潟の方が後ろ向いて、「西村さん、ここを埋め立ててしまわなくて良かったわね」と言われるのですね。また進んだら、また同じことを言われるのです。それが何度も繰り返されました。

新潟はお米が取れるところで船でお米を運んでいたもので、曲がった形状の水路がたくさんあったとのこと。昔は川沿いに柳が植わっていて、床几(しょ

うぎ)を出して遊ばれていたようです。しかし、新潟市が川を埋めてしまって、その川はなくなってしまったそうです。埋めてしまったため、にごった汚いドブのような川がいっぱいできてしまった、遊ぶ風景も失われてしまったと、本当に悲しいとのことでした。いずれそこを掘ってきれいにして、八幡のようにするから、そのときには来てねって言われています。その方々は3度八幡へこられました。初めの頃100人ぐらいで来られたときはびっくりしたのですが、だんだんお年を召した方は来られなくなりました。でも若い人は見えて、それから20年近くなります。一度新潟には行って、どうなっているかを見たいなと思っています。過渡期にあるまちづくりの姿、できてしまったところいろんなところが町の中にはありますが、みんなが見に来てくださったり、想いを寄せてもらったりして、私も、いい思いをしたなと思っています。

## ■鄙びたところを上手に生かす

**西村** 八幡堀の歴史は全部知っておられると思いますからここではお話ししませんけれども、やはりロマンがあると思うのです。それは、石田三成の娘さんなどが坂本城に行くときも、そこを通過して行った、何百年の歴史が安土城を通過してきた、そういった小説の舞台になった、そういうロマンが息づいている地域は他にはあまりないと思います。私はそれはすごく自慢してもいいなと思っています。

この間、高校まで一緒だった人たちと湖北の高月(高槻)を訪れました。高月観音堂の十一面千手観音立像はよく知られていますが湖北には小さなお寺がいっぱいあります。昔、高月の奥にあるお家に伺って「鍵貸してください」と言って貸してもらって開けて見せていただいて、みんなが作った守った仏様を拝ませてもらって、鍵を返しに行ったことがありました。それが今でも懐かしいとみんな思い出してくれました。ただ今はそこも大分開けてしまって、車で行けるようになって、駐車場が整備されていました。私たちは歩いて行って拝んだ経験があり、そういう体験が今はなくなっているの、今来られたら残念がると思います。

昨日か一昨日に、国の文化財になったという菅浦に、も行きました。二度ほど行って思うことがあります。

八幡、滋賀は、本当に意識的にしたのではない、文化遺産、歴史的遺産が本当にいっぱいもれている町だと思うのです。それを掘り起こしてしまって、びかびかにしてしまったらもう駄目だと思います。私はいつも言うのですが、やはり鄙びたところを上手に生かして、昔の八幡の人の人情などそういうものが感じられるかが大切だと思っています。八幡では、昔から表を掃くときに、1軒向こうまで掃きなさいと言われていました。水まきも水やりも隣の家の半分までまきなさいと。そのような思いは、やはり「八幡ならでは」と思うので大切にしていきたいと思っています。

### ■普段は知らん顔、でもみんなの原点は八幡堀

**西村** 観光客が増加したことに、町への正の影響と負の影響。これまでお話した中でいろいろ出たと思うので、これ以上は強いて申しませんが、私が八幡学区の役員をしているときに、ある冊子を作ろうということになりました。昔あった滋賀総合研究所に仲良しの人が何人かいたので、指導いただきながらみんなアンケートを採りました。そうしたら、みんな普段は知らん顔しているのに、98パーセントの人が八幡堀が一番大切に残さなければいけない所と回答されました。今でも保管してありますが、みんな八幡の人は、そこが原点だと思っているのですね。やはりこれがあるこそその八幡という思いで、それは他では真似できないところなのです。みんな知らん顔をしているみたいですが、やはり心の中では思っているのだな。だから今でも、何百年か続いている背割りの掃除が続いています。何かあっても「今日は背割りの掃除やから行けへん」と今でも言われたりします。

### ■八幡の良さを温存しながら

#### 新しいものを入れていく

**西村** 観光客の増加については、例えば、ラ・コリーナはラ・コリーナで良いと思いますが、昔と比べると伝建地区を訪れる人もヴォーリズさんの建築を訪れる人も少なくなりました。心変わりする人も多いのです。駅に京都、奈良、大阪辺りからの人がいっぱいいますが、みな路線バスに乗って、まずラ・コリーナに行く、それから、帰りに町中に寄る人もいれば、そうでない

人もいる。八幡山にはもうあまり行かなくなりましたね。

**田中** そうですね。そのように変わってきましたね。

**西村** 八幡山に行くと、私の言うロマン。安土城が見えて、ずっと蒲生野が見えるのですよね。八幡山を訪れないのでそれが見えなくなっていると思いますが、それは、仕方ないことですね。

ただ、まちづくりと観光については、自分の考えは今も変わってないです。「うずもれた宝物を、磨き過ぎても」というのは、所謂八幡の良さを温存しながら、また新しいものを入れていくということです。

町から離れるまでに壁をピンク色のような色で塗った家があったことがありました。この家に対して、みんな何も言わなかったのかなと思っていたら、10年もしない、5年ぐらいして、その家は色を塗り替えられました。研究会というまでではないですが、皆が注視してやっている側面もあります。皆でこうでもないああでもないやりながらまちづくりをしてきた地域です。

### ■次の世代につながっていく喜び

**西村** 先ほどのアンケートでは、みんな八幡堀が大切という回答でしたが、八幡の町は本当にいろんな遺産、財産が含まれているところであり、それを生かすための町でありたいし、これからもそうやってほしいと思います。観光というふうに言われるといけませんが、「八幡堀まつり<sup>xiv</sup>」になる前は「八幡堀たそがれコンサート<sup>xv</sup>」を10年やっていたのですよ。

**田中** 「たそがれコンサート」、村井さんも担当されていました。

**西村** 「たそがれコンサート」では、50万円を掛けて屋台、ステージを造りました。川の上に設置しなければいけないので、撤去するのも50万円近く掛かるものでした。翌日には、八幡を見たいという人がバスに乗って、ホテルから来て、40人ぐらいがグループに分かれて八幡を見てご飯を食べるという企画もしました。ヴォーリズさんの家の建築の中にも入らせてもらうなど、所謂普通では見られないところを見せてもらうものでした。

コンサート当日は、町の人300人ぐらいがみんなお座布団を持って石段に座って、バンドやコーラスグループの演奏を鑑賞しました。私たちはクラシックを

中心に、子どもはコーラスグループなど手作りでやっていた。雨に降られることなく開催できて良かったです。

今は「八幡堀祭り」が開催されています。蠟燭をつけて明かりを灯しています。それが今もつながっているということは、嬉しいことだなと思っています。大学生のまちづくりに興味のある人も、見に来てくれたり、手伝ってくれたりしています。蠟燭の明かりは、何とも言えない郷愁をそそりますよね。それも竹をパッと切って、かぐや姫が頭から出てくるように、そういう通もあったり、ガラス瓶の中に蠟燭を立てたり、それが今続いてきて次の世代につながっているのはうれしいことだなと思っています。

## ■地域に根付くのは地域本来のもの

**西村** 倉敷に話は戻りますが、倉敷には本当に大勢の人が訪れていました。ただ、これ本当の倉敷じゃないなというような印象を受けました。倉敷には、昔からある民芸の焼き物もあるのに、備前焼がいっぱい扱われていたり。倉敷本来の倉敷らしさというのは、堀に残ったりしていますけど、半分ぐらいは、やはりよその物が占めていて、民芸らしさ、民芸というものはなんでしょうと聞きたいぐらいな感じはいたしましたね。昔は町から離れた所に行くと、ガッチャンガッチャン、イ草で織っている音が聞こえていたのですよ。イ草でできたもの、緞通<sup>xvi</sup>などが中心になればいいのですが、やはり若い人たちをターゲットにすると、ジーンズとなり、すごく立派なお店ができていたりしています。倉敷の人たちも考えていると思いますけれども、違った方向には行ってほしくないなと思います。

倉敷、岡山と八幡とは規模が違い、私が八幡に来る頃に岡山市は45万都市で、ここは5万都市でした。全然規模が違いますが、学ぶところはあります。倉敷駅の北側にチボリ公園<sup>xvii</sup>ができましたが、やはり倉敷には根付きませんでしたね。初めも車で行ったら八幡から3時間ぐらい掛りました。岡山県に入っているのにに行けないぐらい大勢のお客さんがいました。行くたびに孫たちを連れて行っていましたが、つぶれてしまいました。岡山県と倉敷市がすごい損失を出したのですけれども、そういうのはやっぱり根付かない。

大阪のUSJは今すごくテレビでも宣伝しているし、ディズニーランドもすごいけれども、チボリ公園は少し中途半端だったのか、惜しいなと思います。晩になると、無料で散策できるようにしてあったのです。だから私の母は、昼間に行くのと危ないから、夜に行っていました。きれいでなかなか見られない花がいろいろ植わっていて「年寄りにはいいわ」と言っていました。しかし、大勢の人が押し掛けると、年寄りは全然落ち着いて見られなくなります。だからあの二の舞は踏んではいけないなと思っており、八幡の行く末は観光物産協会事務局長の田中さん(本ヒアリング同席者(ヒアリング記録4参照))に掛かっています。

## ■八幡堀を守る会の活動で広がった つながりの記憶

**西村** 長い道のりを来て、現在、八幡堀を守る会 30周年史<sup>xviii</sup>がまとめられています。

岐阜の川の近くにある中学校から、毎年2年生かな、休暇村へ泊まって、ここへ来られます。あるときは一緒に作業をさせてほしいと言われたこともあります。また、大阪の高槻辺の中学生が来たこともあり、八幡をすごく魅力的に思っている子どもたちがだんだん増えてくると思うのですよ。いつも手作りで迎えていて、いつも作文(お礼状)をよこしてくれるのです。私、いつも感動しています。題字は奥野前市長に書いてもらっていました。最初に来られた岐阜の先生は、毎年来るのですが、いつもお礼状は本当にきちんと書いて送ってくるのですね。「僕らも今は、長良川の下流のほうを、きれいに泥やらをのけて、一生懸命頑張っています」というのをくれました。

**田中** 継承というか、記録とか記憶ですよ。やはり大事なものです。

## ■みんなの合意と協力で

### 成り立っているのが八幡堀

**西村** 資料をもとに探せば、いろいろなものが探し出せます。近隣の者たちで景観を形成していこうという近隣景観形成協定<sup>xix</sup>を結ぶ活動もしました。18人でもともと始めました。次に100人超えたらいいねと言うので、私はマップに加入してもらった方の家に色を付

けていたのです。みんなに頼んで、104件になったかと思います。国の1級河川なので、私たちの一存とか市の一存ではできないので、滋賀県のほうに行って1年かかって計画しました。手すりも何もないでしょう？それだけでも何日間もめしました。

**田中** よく今思えば、確かにそうですね。

**西村** 「八幡堀は危ないから気を付け」と言うのが昔からの親の役目でした。だからそんな所に柵を作ったらあかんという意見があるのですよ。もうひとつは、学校から帰ってポンとかぼん置いたらみんな、ジャコ釣りをするなど、八幡堀が遊び場でした。瓦屋さんに働いている人も、そこのお水できれいに洗うと黒くなるでしょ。そういう場所なのだから、みんなで守らなきゃいけない。みんな暗うなったら帰りやと。その代わりお魚をとって帰っていったみたいなのです。みんなの合意というのか、協力とか、そういうもので成り立っているのが八幡の特徴かなというふうに思っております。

**田中** そうですね。誰かの命令とか、そんなのではないですね。

### ■八幡堀は魚たちが生きる大切な場所

**西村** 主人が撮った写真があります。湖面に空が写っています。ここは湖西から来た舟が曲がれるようになっています。ここは神社の社領みたいなのです。湖西から燃料の木をいっぱい運んできたりして、瓦を作る。長い舟は今でいう宅配船ですね。その水路が草で覆われてしまって何度かきれいにするための努力をしました。まだきれいじゃないですけども試行錯誤の結果が現在の姿です。

そうした中、1989年7月29日に台風で魚がいっぱいあがってしまいました。赤レンガの里の所に低い堰があります。水が引くときに魚が帰れず残ったのです。軽トラ1杯ぐらいの魚があがり、その中に外来魚ではない魚がいました。このときからやはり八幡堀は、私たちだけのものではなくて魚たちにとっても大切な所なのだから、水をきれいに保とう、堰止めをしたら駄目だと自然からいっぱい学ばせてもらいました。

### ■市民、子供が喜ぶ八幡堀での体験

**西村** 大きな事業としては、お能をしたのを覚えてい

ますか。衣装製作などに300万円か400万円を掛けていたかと思います。八幡の子どもも出てえいやって舟を漕ぎました。山折哲雄<sup>xx</sup>先生がわざわざ監修で来てくださって、本式の金剛流のお能の舞台が見れたと喜んでおられたので、本当に良かったなと思っています。

衣装に関しては、ここの竜神さんを形作ったかぶり物もされてすごいものでした。特設の水上ステージも造って、大勢の方が見に来られ、ああ、なんと素晴らしいところだろうとみんな思っているし、一緒に行った子どももその辺の童になって、舟に乗って、そこを通って行く。その経験は一生の宝物になります。だからそういった意味では、八幡堀はみんなのものです。

### ■八幡堀は自分たちだけのものでない、

#### 地球は一つ

**西村** 若葉町のある人に「私たちのところは住む所、客間が八幡堀」と言われました。時々その人は、掃除にも来てくれましたし、八幡堀が八幡の客間なら、私たちがきれいにしなきゃいけないというふうに思っています。本当に次の世代の人がこうした思いを理解して、これをずっと継承していってくれたら、本当に言うことないなと思っております。

初めの頃は、キャンプで1カ月だけで100人ぐらいを琵琶湖に招いて、この辺でも遊ばせてあげたり、安土でオルガンを聞かせてあげたり、いろんなことをしました。永源寺からずっと上がって行って、山がありますね。そこに絶対に上まで行くと、きれいな水が湧いていて、口ですくって飲めるだろうと思って、楽しみに行ったのですよ。1998年のことです。そうしたら「駄目です」と言われました。「なんでですか」と聞いたら、「今、チェルノブイリ<sup>xxi</sup>で、1週間ぐらい前に爆発が起きて、ここも汚染された空気が流れてきているから、そんな外の水飲んだら」と言われました。その時、地球は一つなんだ、だからみんなで頑張らなければいけないんだなと思い、それからはそうした視点で自分の所も見直すようになりました。そういったこと、みんなに体験させてあげるというのは必要だなと思いましたが、なかなかできませんでした。

また、子どもたちに八幡で造られる真珠を見せてあ

げたことがあります。そうしたら、子どもたちは「琵琶湖でこんなにきれいな真珠ができるのですか」と驚いていました。NHKが撮影に来たときには、生産者の方が貝を開けて見せてくれました。10個のうち3個くらいが死んでいましたが、残りの7つはきれいでした。そういう意味からも、琵琶湖、西の湖につながる八幡堀はきれいにしておかないといけないというのは、子どもながらにみんな分かっているのです、非常に嬉しいです。本当にここではきれいな真珠が採れるのですよ。

## ■八幡は誰のものというわけではなく、 みんなの手作り

**西村** 本当にいろんな方が来てくださって、泊まってくれて、晩ずっと話せたりして、私は本当にいい、ロマンのあるいい生活をさせていただきました。

近江八幡と倉敷はよく似ていて、この間誰かが「倉敷と近江八幡に行ってもう思いました？」と質問してきました。私は、「良く似た所よね、水があって、古い家があって。けれどもやはり今は、自分がそこで手をちょっと携えたというだけで、やっぱり八幡のほうが思い入れが深いのですよ」と言いますと、「そうやろうね」と返されます。私たちが子どもの頃からといえば、倉敷も少しずつきれいにしていって、あるおじさんが白鳥をあそこに飼ったりとか少し違う部分もあります。それから倉敷民藝館、倉敷考古館<sup>xxii</sup>ができたたりしているのも、あの周りの蔵を使って必然的にできたものでしょう。それからどんと倉敷アイビスクエアができて、倉敷国際ホテル<sup>xxiii</sup>ができて、それらがメインになってまちづくりの拠点ができたわけですが、八幡は何となく、みんなの手作りで、そして誰のものというわけではなく、みんなで共有しながら、そう思われませんか。

**田中** 本当にそのとおりでと思います。

**司会** 誰のものって、本当にみんなのもんですね。みんなで作り上げていますし。

**西村** 本当にみんなで作り上げています。

**西村** ああでもない、こうでもないともちづくりには本当にいろいろあります。誰にしてもですけども、誰かから言われてせよというのではなくて、みんな自分らでやっているんだという意識はあります。

## ■磨きすぎない、ほどほど、適度に、 節度をもって

**西村** 文章の最後に私が書いている「住民の郷土愛と連帯感に根差した、個性豊かな誇れるまちづくりを目指しています」。この資料は最近、7、8年前か、5、6年前から配っていて普通のまちづくりではないということを知ってほしいと思って書きました。それは、私、最初の頃の文章だから、結構私の思いが入っています。

**司会** この「磨き過ぎても」ということを言う人が、今はほとんどいないのではないのでしょうか。

**田中** 「磨き過ぎても」というのは、大事なことです。『ほどほど』というのか、『適度に』とは大事なことです。何でも本当に『磨け磨け、掘り起こせ掘り起こせ』となっていますもんね。

**西村** そんな褒めていただいて、ありがとう。

**田中** これも「節度がある」というのは大事なことだと思います。多分その辺が近江八幡らしさですね。

**西村** 私も、それを言いたいのですが、私も上手く言葉で表現できていないです。

**司会** 磨き過ぎないように、上手く何かこう、手を加えるのが一番難しいですね。

**田中** ちょうどいい加減というのは難しいですね。

**西村** 言葉では上手く表現できませんが、私の頭の中には、倉敷という見本があるから加減がわかるのだと思います。今回の取材の事前質問を見たときにふと思いました。小さいときから通っていていた場所がどんどん変わっていきました。大原美術館の前を少し行くとトンネル付近は、誰も通ってなかったです。その頃、私は疎開していて、倉敷に帰ってきたときにトンネルの向こう側にある、お茶の先生のところに行こうとしました。トンネルの中には、誰もいなくて怖いから、一生懸命その中を走ったのを覚えています。今は通る人はいっぱいです。ずっと変遷を見てきています。だから、磨き過ぎないように温存しながら進める。

**田中** そうですね。変わっていくのは大事だけど、変わり過ぎると、何のためのふるさとづくりなのかがわからなくなってしまいます。

**西村** ふるさとでなくなると言う人がいますよね。

**司会** 何というか、ふるさとを分かる方が、やはり核として真ん中にいらっしやらないと、こういう磨き過ぎない、加減ある手入れは難しいと思います。どちらかというと感性を必要とするもので、定量のみでコントロールできるものでもないなど感じます。

今回は倉敷も話題にさせていただきたかったのですが、大原謙一郎さんに寄稿いただいた機関誌『観光文化』の巻頭言<sup>xxiv</sup>をお持ちしました。

**西村** 「市民生活の美しさ」、これは近江八幡に通じるところありますね。

**田中** 西村さんの話を聞いていると、男性社会の中で女性らしさの視点や、女性ならではの役割を果たされていたり、見えないところでの潤滑油と言いますか、男性だけでしたら、多分絶対けんかして物別れして終わってしまうような気がします。

**西村** 後始末ですね。女性は家を守るために、国に行ったりすることはできないです。八幡堀は250メートル直ただけで、土ばかりでなく木が欲しいね、蔵は押したら倒れそうですが、つぶしたらいけないし、あの形をいかに残すか。

**田中** 西村さんはそのように思われ、浜ぐらを造った仲間たちも一緒に思いを共有されているというのもまた素晴らしいですね。

**西村** みな自分の家のこともあるのに、ご主人たちが頑張っている、JC でやっているのを見ているから、理解しやすかったのです。「こんなんしたら、あかんわな」とか、「こんなしてしまったら、どこにでもあるじゃない」とならないよう、本当によくここまで来たなと思います。

**田中** 八幡堀を守る会の30周年で、いろいろな事業も行なわれます。まだまだ本当にご活躍いただきたいと思っています。

(発行:2022年9月2日)

<ヒアリング記録 2>

日時:2018年3月10日(土)15:00-16:30

場所:酒遊館にて

対象:西村恵美子氏(元八幡堀を守る会事務局長)

同席:田中宏樹氏((一社)近江八幡観光物産協会 事務局長)

司会:(公財)日本交通公社 観光地域研究部

主任研究員 後藤健太郎

※上記は、全て当時の役職。

- ・本資料は著作物であり著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い引用の際は必ず出所を明記してください。
- ・本資料の全文または一部を転載・複製する場合は著作権者の許諾が必要ですので下記お問合せ先までご連絡ください。  
公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 後藤健太郎  
電話番号:03-5770-8440  
Website:<https://www.jtb.or.jp/>

- <sup>i</sup> 1717(享保2)年創業。近江八幡唯一の蔵元。酒游館は、明治蔵2棟を改装し、ゲストハウスと多目的スペースとして1992年にオープン。
- <sup>ii</sup> 浜ぐらは地元有志による5人で共同経営されていたが、現在は、株式会社カネ吉に譲渡。
- <sup>iii</sup> 1983年に設立された「ハートランド近江八幡資金会議」は1996年に財団化。一人ひとりの市民が自由意志で参加し、育て、行政・企業とのパートナーシップを保ちながらまちづくりを行っていく開かれた組織。
- <sup>iv</sup> 1928年、兵庫県生まれ。日本の心理学者。京都大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授。
- <sup>v</sup> 岡山大学は、岡山医科大学と昔の第六高等学校、岡山師範学校などが合併して現在の岡山大学となった。
- <sup>vii</sup> 現在は株式会社クラレ。大原孫三郎氏により設立された倉敷絹織株式会社がもととなっている。1949年に倉敷レイヨン株式会社社名を変更、1970年より現在の社名となる。
- <sup>viii</sup> 明治時代の倉敷紡績所発祥工場の外観や立木を可能な限り保存し、再利用して生まれた、ホテル・文化施設をあわせもつ複合観光施設。設計は浦辺鎮太郎氏。(公式ホームページより)
- <sup>ix</sup> 日本を代表する建築家。1913年、大阪府生まれ。1938年、東京帝国大学工学部建築科を卒業。代表作に広島平和記念資料館、代々木第一体育館、東京都庁舎第一本庁舎がある。
- <sup>x</sup> 地元有志による自主的に除草作業が1987年の「八幡堀しょうぶの会」に発展し、翌年に「八幡堀を守る会」へと改称した。
- <sup>xi</sup> 近江八幡市郷土史会元会長。
- <sup>xii</sup> 近江八幡市生まれ。近江八幡市役所にて税務、商工観光等に携わる。その後、福祉こども部長を経て、現在、社会福祉法人サルビア会特別養護老人ホーム水茎の里施設長。
- <sup>xiii</sup> 1985年4月オープン。親、子、孫、三世代が交流できる福祉施設

- として厚生省社会保険庁が約70億を掛けて建設。全国で12番目の施設(広報おうみはちまん1985年4月)。2009年3月営業終了。跡地には、ラ・コリーナ近江八幡がオープン。
- <sup>xiv</sup> 近江八幡の夜の情緒を楽しんでいただけるよう「町家見学」「灯り」「コンサート」等、様々な企画が催される。毎年、秋の週末に開催。
- <sup>xv</sup> 近江八幡青年会議所が開催。
- <sup>xvi</sup> だんつう。敷物用織物の一種。中国語のダンツ(毯子)のあて字。手織りの重厚な絨毯で、特に小ぶりで方形のものをさす。(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典)
- <sup>xvii</sup> 1997年、旧倉敷紡績倉敷工場跡地に開園したテーマパーク。2008年12月31日の営業終了。
- <sup>xviii</sup> 『八幡堀を守る会30年のあゆみ 遺産を受け継ぎ未来へつなぐ』、八幡堀を守る会、2018年7月発行
- <sup>xix</sup> 1989年に近江八幡市で初めて協定を締結。
- <sup>xx</sup> 宗教学者。1931年生まれ。国際日本文化研究センター名誉教授(元所長)、国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。
- <sup>xxi</sup> ウクライナ語でチョルノビリもしくはチョルノービリ。本記録では、当時の会話を回顧したものであるため、当時の表現を使用。
- <sup>xxii</sup> 倉敷美観地区にある施設。倉敷民藝館は、1948年にオープンした民藝品を展示する施設。倉敷考古館は1950年にオープンした江戸時代の倉を改装した小さな考古博物館。
- <sup>xxiii</sup> 浦辺鎮太郎氏が設計。1963年12月にオープン。倉敷美観地区内にあり大原美術館に隣接。
- <sup>xxiv</sup> 大原謙一郎(2012):「巻頭言 倉敷―「まち」の価値と市民生活の美しさ～お客様の数は二番目に大切な指標と考えたい～(特集 観光地づくりの本質を探る―観光まちづくりの「心」とは)」、『観光文化』215号